



【文・写真】.....中村達雄

時代のノスタルジー

蘇州河が黄浦江と合流する外灘^{ぐだ}の北辺には、1900年代の初めに建てられたレンガ造りの建築群が老醜をさらしている。まるで時代という大きな時計の針を止めて、20世紀初頭にこの街を覆った空気感を封じこめているかのようだ。河畔に立ちて上海大廈ブロードウェイマンション、1904年築）の雄姿を左手にバンドの方角を見やると、そこには朝日をあびた外白渡橋（ガーデンブリッジ、1907年築）がモノクロームのシルマツトを浮かび上がらせている。外白渡橋のとなりは乍浦路橋で、かつては二白渡橋（1927年築）とよばれた。外灘と虹口地区をむすぶ四川北路（北四川路）は蘇州河で分かれたれ、それを繋いだのが四川路橋である。河水で分断された四川路を結んだから四川路橋とは、なんとも愛嬌や色気を感じない命名だが、実はもともと裏白渡橋（1922年築）という古名があった。

外白渡橋、つまりガーデンブリッジは蘇州河から見て一番外側の渡し場だから「外灘渡口」で、それが訛って「外白渡橋」になったらしい。そして外側から二番目にある橋が二白



【右】ガーデンブリッジとブロードウェイマンション
【左】黄浦江の対岸に東方明珠タワーが見える

一九三〇年、上海日本人街

虹口界限



渡橋で、もっとも奥に位置する橋が裏白渡橋になった。「裏」には、中国語で「内側」とか「奥」という意味がある。

蘇州河のむこうは虹口

かつてこの街には多いときで10万人をこえる日本人が居住していた。1920年代から日本の敗戦にいたる1945年までの20余年間のことである。日本人は蘇州河北岸から北

にのびる北四川路沿いの虹口とよばれる地区に集住していた。虹口地区の始まりを象徴する歴史的な建物が今でも残っている。時計塔の造作が美しい郵政大厦（上海郵政総局、1924年築）だ。裏白渡橋のたもとに屹立する姿は、東洋に君臨したモダン都市上海の威容を彷彿させる。上海の歓楽街といえは^{ダマロ}大馬路（南京路）から南にひろがる二馬路（九江路）、三馬路（漢口路）、そして「夢の四馬路」とまで歌われた四馬路が有名だが、川むこうの虹口もなれば日本人専用の風俗街として複雑な殷賑を極めていた。満州事变（1931年）直前の上海に遊んだモダンイズム文学の騎手、吉行エイスケが著した『新しき上海のプライベート』の華麗な文体に語ってもらおう。

……上海の新宿と云われる北四川路界限の無数のインチキ・ダンスホールには半裸の膚を夜会服につつんだ混血児の踊子と、日本、支那、ロシア、ポルトギー、と見知らぬ国籍を持った世界各国の女が、享楽を求めて集まってくるコスモポリタンの腕の脂に抱擁されて、ジャズのなかで涙一滴の恋いを囁く……

カキユ



【右】上海の歴史を刻んできた郵政大厦の時計塔
 【左上】四川北路の欧風建築 【左下】社交ダンスは老人の娯楽

四川北路を歩く

四川路橋(裏白渡橋)で蘇州河を越えると、街路の様相は一変する。外灘のスノッパな雰囲気はなくなり、街が親しみやすくなるのだ。郵政大厦のとなりが新亜大酒店(1934年築)で、歩を進めていくと左前方に大橋大樓という名前のL字形ビルが見えてくる。日本憲兵隊本部(1937〜45年)だったところである。日本が敗戦した後は国民党が接收して警備司令部を置き、その後は中国銀行の職員宿舎として使われた。憲兵隊本部だったところはすむかいには、最近、新亜州城という娯楽センターが落成し、その空き地でお年寄りたちが社交ダンスを踊っていた。

四川北路はやがて東西に走る海寧路と交わる。この界限には東和劇場とかピクトリア影戲院、アポロシアター、リッツ劇場、第二歌舞伎座などの劇場や映画館、それにホテル、旅館などが蝟集していた。現在では東和劇場が解放劇場に、リッツ劇場が国際電影と名前を変えて興行しているが、とてもかつての賑わいにはおよばない。

海寧路を横切って武進路との交差

点に進む。十字路の南東角には福海商厦という高層の商業ビルが建っている。このあたりに西本願寺(1931年築)があったはずだ。武進路とその先の虬江路に挟まれた一帯では、日本人街最大のキャバレーであったタイガーハウスやビーナスカフェ、カフェ江南といった歓楽場が有名で、吉行エイスケが記した無数のインチキ・ダンスホールがひしめく上海の新宿とは、この辺りのことを指していたのだろう。

横浜橋と魯迅

路地を覗きながら四川北路をさらに進む。前方に兪涇浦とよばれるクレークが蛇行し、そこに横浜橋が架かっている。横浜橋の「浜」は、中国語では小河(クレーク)の意味になる。日本人街のど真ん中にこんな名称の橋があれば日本とのゆかりを想像してしまうが、実はなんの関係もないらしい。

横浜橋から山陰路に至る道筋には内山書店(魏盛里、1917〜29年)や創造社出版部(マゲノリア・テラス)麦豊里、1928〜29年)魯迅が国民党の攻撃から身を隠していたラモス・アパート(北川公寓、1



930(33年)などがあつた。この一帯は日本人街と中国人街が背中合わせに連なり、その複雑な街路を巧みに利用した革命家たちの隠れ家ポイントにしていたのである。妻の三十年代を若い恋人から引き離すためパリにむかつた金子光晴は、途中、上海の余慶坊(1928(29年)に旅装を解いた。そのときのことを綴った『どくる杯』の中で、筆者は次のように記している。

……蘇州河の河岸つぶちにしゃがんで、魯迅が石で土のうえに図を書いて説明していることもあつたし、横浜橋のらんかに郁さんが腰かけて、一時間ほども二人でじつと考えこんでいることもあつた……

郁さんとは、白色テロで逝つた郁達夫(作家、1896(1945年)のことである。

文化人が暮らした街

横浜橋を通過したところで、人と車で雑踏する四川北路を離れ、わき道にそれてみたい。進行方向左側の路地に迷いこむ。多倫路である。ここは前述した内山書店や魯迅の旧居が

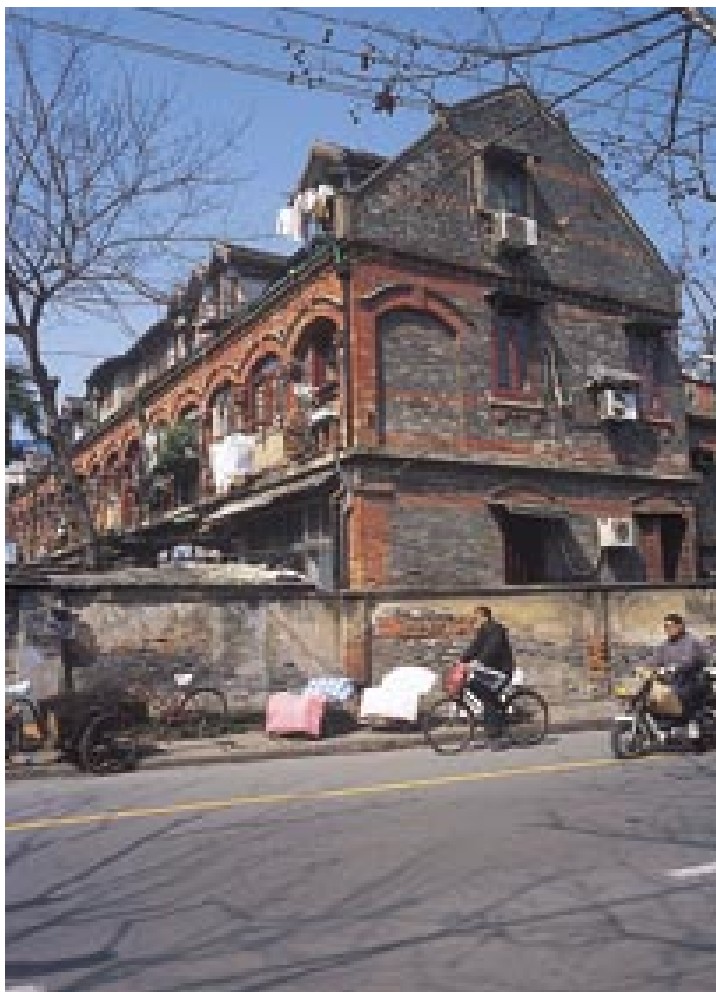
近く、柔石(小説家、1902(31年)、葉聖陶(作家、1894(1988年)らも住んでいた。当時の文化人が暮らした街を連想させる雰囲気には満ちている。路地の入口には珈琲店があり、歩みを進めることに書店や文学記念館などがあらわれて興味深い。20世紀初頭の古建築もよく保存され、複製だと思つが、軒先には仁丹の広告看板が下がっている。往事の上海は、日本軍と味の素と仁丹によって占領されていた、といわれるほど、二つの看板が林立していた。

お洒落な多倫路から四川北路に戻するため、豊楽里という里弄を通る。老人や子供が行き交い、物売りが叫び、犬猫が走りぬける。長屋の門牌にはめ込まれた「豊楽里」という古体字のレリーフが地域の年輪のようなものを感じさせる。「豊楽里」の上に、さ





【右】山陰路に残る旧日本人住居
【左】天窓は里弄（長屋）のシンボル



匂いたつ上海の朝景

らに「壹北」とか「壹南」の文字が見えるのは、なぜだろう。

余慶坊をすぎると四川北路は大きく左に旋回し、今はない上海神社（1933年築）方面にむかつてのびていく。左にまわらないで右に行くと、道は山陰路に進入する。この並木道はかつてスコットロードとよばれた。

ここには興業坊とか花園里、東照里などの里弄（長屋）があつて、ジャーナリストの尾崎秀実、松本重治、作家の吉行エイスケらが棲んでいたところとしても知られる。中国人では茅盾、文学者、1896（1981年）や瞿秋白（革命家、1899（1935年）の旧居、そしてラモス・アパートを去った後の魯迅が終の棲家とした居所（魯迅故居、1933（36年住）もこの界隈にあつた。

坊や里とよばれる長

屋は上海の典型的な集合住宅である里弄の形式を踏んで、赤レンガの色彩がとても美しい。美しいのだが、住宅としては致命的な構造上の欠陥があつた。屋内に便所がないのだ。だから、住人は夜間、モードン（馬桶）とよばれる糞尿処理用の桶おまる）を使つ朝になると、糞屋が各戸をめぐって馬桶にたまつた残骸を回収してまわる。そのあと、使用人や女中が家の裏口で家族の人数分の桶を洗つ。匂いたつよう

な上海の朝の風景だ。戦前、多感な少女時代を虹口ですごした林京子はその著書『ミッシェルの口紅』の章節で、隣家の女中、明静と一緒に馬桶を洗つた情景を描いている。

……私は明静を真似てモードンを斜めにかしげた。そして腰を折り曲げて勢いよく、先が開いた竹ひこの束で底を掻きまわした。勢いがあまつて、水が外に飛び散つた。明静が、ゆっくり、と手真似でいった。まわりについていた排泄物が水の渦に溶けて、水が白く濁っていく。白く濁つた水を、明静が溝に捨てる。私毛水を捨てる。明静の動作をみながら仕事を進める私に、ホウ、いいよ、と明静がいった……

山陰路の里弄の周辺にはお屋敷風の建物が散在している。門の造りや窓枠などに濃厚な和風が感じられ、かつてこの辺りに数万人をこえる日本人が居住していたことを思い出させる。街のいたるところに、日本の建築様式や生活の匂いなどが深く染みついているのだ。蘇州河の裏白渡橋を起点に、四川北路から山陰路にいたる日本人街は約1時間の道程を経て、ここで終わる。

見どころ

蘇州河畔 / 郵政大廈界限

虹口地区の入り口。上海大廈(ブロードウェイマンション)や外白渡橋(ガーデンブリッジ)は至近距離にある。1930年代の外灘の雰囲気も濃厚に残っている。

横浜橋周辺

兪涇浦とよばれるクリークが蛇行し、そこに横浜橋が架かっている。雑踏する普通の街並みがあるだけ。実際の横浜とは何らの関係もないが、この奇妙な偶然の一致が旅の思い出を増幅させてくれるにちがいない。

多倫路界限

珈琲店や書店、記念館などが多いので、街歩きに疲れたら小休止しよう。多倫路から四川北路にもどる豊樂里には濃厚な上海の空気感がただよ。

山陰路

坊や里などとよばれる里弄の連なりが美しい。あちこちに点在するお屋敷風邸宅の門や窓には、和風の建築様式が採用されている。現在の上海で、旧市街の雰囲気がもっとも濃厚に保存された地区といえる。

魯迅故居(山陰路132弄9号)

ラモス・アパートを去ったあとの魯迅が終の棲家にしたところ。山陰路の真ん中あたりに大きな看板が出ているのですぐわかる。1989年から一般公開されている。



旧上海を知るための本

吉行エイスケ『新しき上海のプライベート』

(平野純編『上海コレクション』所収、ちくま文庫、1991年)

第1次上海事変の直前、筆者が現地で目の当たりにした「獵奇の天国」の街を描き出している。軽妙、洒落な文章は吉行モダニズム文学の真骨頂。

金子光晴『どくろ杯』(中公文庫、2001年)

筆者と三千代夫人による中国、東南アジア、ヨーロッパ放浪記の中国部分。『マレー蘭印紀行』『西ひがし』『ねむれ巴里』とともに放浪4部作の代表作。1930年前後の上海を詩人の感性で克明に描写。

林京子『ミッシェルの口紅』(講談社文芸文庫、2001年)

筆者は少女時代を戦前の上海ですごした。少女の視線、少女の感性で1930年代の上海をみずみずしく描写している。

尾崎秀樹『上海1930年』(岩波新書、1989年)

ゾルゲ事件によってスパイとして処刑される尾崎秀実は、1928年11月、上海に赴任した。混迷の只中に有る中国の現実に直面し、魯迅、スズメレー、ゾルゲらの知識人たちと交流しながら、中国の民族解放やアジアの自立の道を模索する。

堀田善衛『上海にて』(ちくま学芸文庫、1995年)

日本が敗戦する直前の上海滞在経験をもとに、解放後の上海を訪れ、街の諸相を細かく分析、描写している。

内山完造『そんへえ・おおへえ』(岩波新書、1984年)

虹口に店開きした内山書店を核にして、中国人、日本人の人間模様、1930年代の上海の世相を描いている。筆者上海生活35年の記録。

木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』(大修館書店、2000年)

現在の名称と戦前の名称が併記されていて便利。重要建築物の建築年なども充実している。写真も豊富で、上海の街歩きには必携。

大上海新地図(謙光社、1986年)

1937年時点の上海の全貌を俯瞰できる。木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』と併用すると便利。